

中国の「四二一家族」における育児をめぐる家族機能と関係性の変容
－「80後」世代母親の語りに基づく質的研究－

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
汪 為 (WANG Wei)

日本と同じような少子高齢化問題に直面している中国社会においては、祖父母の育児は「隔代教育」と呼ばれており、祖父母の育児力を利用することは、極めて一般的な現象である。本研究は「一人っ子政策」の変遷を背景とし、35年間の「一人っ子政策」の実行に基づき成立した「四二一家族」を研究対象とした。「四二一家族」とは、両親の二人と子供の一人が共に「一人っ子世代」であることに加えて、四人の祖父母により構成された家族のことである。「80後」(1980年-1990年生まれの世代)の母親の視点から、「四二一家族」の育児機能をめぐって、祖父母と両親の役割分担と関係レベルの変容および育児への意味づけを明らかにすることを目的とした。本研究は広い意味での質的研究であり、子供の年齢は1歳から3歳に絞った「80後」母親の8人に、「四二一家族」の育児をめぐる家族内役割分担や祖父母の育児の弊害とそのコーピング、育児から感じた意味などについての半構造化インタビューを通じて母親の語りを収集し、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。

結果として、「四二一家族」における育児機能の変容プロセスとして四つのカテゴリーが生成された。(1) 母親は子どもの三歳までの発達を大事にするが仕事により自分が育児できなくなり、夫と保母の育児可能性を検討する。その結果祖父母の育児支援を受ける方針となり、多くは母方祖父母に支援を依頼する。(2) 母親の育児と異なった祖父母の育児が成り立った時点で、二つの育児観が並立する。(3) 祖父母と両親の育児が並立する状態から、同時に平行して二つのプロセスが生じる。家族内における関係性の変化の展開では、並立する状態から育児の対立に移行し、仕組みのマネジメントから理解の深化を経由して祖父母への受容に至る。母親の育児体験から育児の反省に移行し、反省が日常化され子どものために母親自身が自身を変容させることに繋がる。(4) 以上の経験を踏まえて、母親は育児の意味づけにおける個人的な変容と関係的な変容を達成するが、同時に、母親でありながら女性として育児と仕事を両立する矛盾を抱え続けることになる。

以上の結果を踏まえて、中国の都市部における「育児」の現代像を描写した。子どもをめぐる打ち立てた居住関係や家族内役割分担に基づいた「四二一家族」の家族関係が、再び育児という課題において統合され、母親の内面でも「子供という家族の絆」という意味づけとして定着した。これは子どもを中心におくことで、「四二一家族」における親族関係の親密化が生じていると考えられる。さらに、祖父母が家事と育児の援助者となるという意味で、家父長制の崩壊とともに、母親の主体性が育児機能という課題を通じて変容していることが示唆された。